

プロローグ



She continued
destroy slime for
300 years

相沢梓^{あいぞく あずさ}、二十七歳、女、独身。
社畜。

仕事のために、仕事のためだけに生きてきた。
恋、遊び、その他全部、横に置いてひたすら仕事をした。

最高で五十連勤というのも記録した。労働基準法ってどこに行ったんだろう。
そしたら、ある日、仕事中にばたつと意識を失った。

次に目を開いた時には、若い女の人の顔があった。
しかも、その人、天使の羽みたいなのが生えているじゃないか。

「ああ、私、死んだんですね……」

本当に仕事のためだけに終わってしまった人生だった。
この人は天使か死神かわからないが、そういうジャンルの何かだろう。

「そうです。あなたは働きすぎで二十代で過労死してしまいました。おいたわしいことです……」
その子は私のために悲しんでくれた。
きつと、心のやさしい子なのだろう。

「その代わりと言ってはなんですが、あなたは来世ではとことん幸せな生き方ができるようにして差し上げます。どんな力がお望みですか？ あるいは王国の姫として生まれるというのでもいいですよ。ああ、性別もどちらでもかまいません。たいいていのは自由にできますよ」

「本当にどんな願いでもいいんですか？」

「はい！ 私は女性には甘いのです」

それ、男女不平等なんじゃないか。まあ、制約が多いよりは少ないほうがいいか。

「じゃあ、私を不老不死の存在にしてください」

それが私の願いだった。

仕事に追われているうちにすぐに人生が終わってしまったので、次はもつと長く生きたいのだ。

「では、体の中をマナがぐるぐると循環して老いることのない体で転生させましょう」

そんなことがあっさりできるらしい。なんて素晴らしいんだろう。

「ほかに何か要望はありませんか？」

「いえ、それだけでいいです」

「本当に？」

「はい。長くいたらだとスローライフを送るのが目的です。基本的に自給自足で、山の上とかに住もうかなと。それで、塩とか手に入れるのが難しいものだけ、近くの村で手伝いでもして分けてもらえれば満足です」

大都会東京で暮らしてきたので、山の上の家で呑気のんきに生きたい。大都会といってもマンションと

職場の往復ぐらいしかしてなかったから、大都会の生活を満喫まんきつしたとすら言えないけど。

「前世での苦勞がしのばれます……。わかりました。不老不死で、のんびりした高原に転生させましょう。きっとおばあちゃんのまま長生きしたいという意味ではないはずなので、十七歳の容姿で不老不死ということ」

また、私の意識は薄うすれていった。



目を覚ましたら、本当に高原に寝そべっていた。

すぐそばにぽつんと一軒家がある。

近づいてみると、こんな張り紙があった。

ちなみに日本語ではないはずなのに、なぜか読める。

長らく、この家に住んでいましたが、
街に移った息子夫婦のところは
厄介になることになりました。
ほしい人がいれば、この家は差し上げます。
ドアのカギも開いていますので。

「ずいぶんと気前がいい人だな。私って運がいい。いや、違うか。あの天使みたいな女の子がそういうところに生まれ変わらせてくれたんだ」

生まれ変わったといえ、どんな顔になっているのだろうと思って、その建物に入って鏡を探して見てみた。

「たしかに十七歳だ。顔も悪くない。西洋風だから、ちょっと慣れないけど」

まぶしいぐらいの金色の髪が腰にまでかかっている、瞳の色もトルコ石みたいにあざやかな水色だ。この世界の標準はわからないけど、まずまずにかわいい。これで女子高生やったらさぞかしもてるだろうな。

服装のほうも、死者が着る白い服ということではなくて、すっかりファンタジーふうになっていた。

それと、遠くからでもよくわかりそうなとんがった黒い帽子。どことなく魔女っぽい。

「よし、今日からここは私の家。梓の家だ！」

異世界に来たんだし、漢字の梓よりカタカナのほうがイメージに合うかな。

そのほうが心機一転した感じがあるし。よし、アズサと名乗ろう。

家の横には畑があるので、ここで野菜を収穫できそうだ。

自給自足生活にもなかなか便利なところだと思う。

転生した時の服に十五枚ほどの金貨が入っているの、最低限のものは買えるはず。

あとはナイフが腰に提げられているぐらい。女性の一人暮らしだし、あるに越したことはないか。

丘の下のほうには小さな町、いや村があるのが見えた。

「ぶらぶらと買い物にでも行ってみようかな」

この土地のことも聞きたいしね。

村に向かう途中、ぶよぶよしたゼリー状のものに道をふさがれた。

「ああ、スライムか」

見た目のせい、緊迫感はない。猫が前に出てきたという程度の感覚だ。

とはいえ、モンスターらしく、こちらを攻撃してやるといふ意思が感じられる。

猫ならばたい、人間を見るとビビって距離を置こうとするのでそこが逆だ。

ここでナイフを抜く。スライムならば倒さないといけない。



攻撃を仕掛ける。

ナイフをゼリー状の体に刺す。

ぶゆっ！ 変な感触が手を伝って体にまでやってきた。

効いてるのかな……？ 刺さりはしたからダメージは与えてると思うけど。

再度、攻撃。

ぶゆっ！

さっきより効いた気がする。

怒った(はずの)スライムがぶつかってくる。

勢いで一歩後ろに下がったが、とくに痛くもなかった。

安全とわかったので、容赦なく攻撃を仕掛ける。

「喰らえ、喰らえ、喰らえ！」

どこかでとどめの一撃が決まったらしく、スライムは姿を変えて、小さな宝石に変わる。

ゲームでモンスターを倒すとお金がもらえるけど、これがそれにあたるんだろう。

自給自足といっても生活必需品ひつじを買うお金は必要なので、遠慮なくいただきます。

村に出るまで、あと二回スライムと遭遇して、倒した。

けっこうスライムって、いるんだな。

村はそんな大きな規模ではないが、なかなかこぎれいだった。スイスに似ている。

そういえばスイスも一度は観光で行きたいと思っていたのに、結局過労死で行けなかったんだ。

仮に休暇を取っても旅行の前に家で寝られるだけ寝ることに使っただろうけど。

親切そうなおばさんを見つけて、声をかける。

「すいません、高原の一軒家に引越してきたんですが、この村のこと、教えてもらえませんか？」

「ここはフラタ村だよ。村のことなら、ギルドの受付のナタリーちゃんがよく知ってるかねえ。ほかの土地から来た冒険者に村のことを説明したりするから、説明も手慣れているんだよ」なるほど。ありそうな話だ。

「ありがとうございます」

「初めて来たんだろ。ギルドまで案内してあげるよ。といっても、小さな村だからそのうち見つかるだろうけどね」

「ありがとうございます！」

本当に親切だったおばさんとともにギルドに行った。たしかに小さな建物だ。平和そうだし、そんなに冒険者が必要ともしていないだろう。

「あつ、イマルおばさん、こんにちは」

「ナタリーちゃん、この子、新しく引越してきたんだ。村のことを教えてやってくれ」

「ああ、いいですよ。では、この受付でご説明しましょう」

ここでイマルおばさんとはお別れだ。近所に住んでるわけだから、そのうちまた会うこともあるだろうけど。

「私、アズサと言います。高原の一軒家に引越してきました」

「ああ、あそこですか。いい場所なんですが、お年寄りには不便ですからね。若い方に住んでいただけるとちょうどありがたいです」

そこから、ナタリーさんは村の解説をはじめた。

何度も同じようなことを説明しているのか、よどみがない。

村自体はとにかく平和、平和、平和ということだった。

歩いていても明らかに牧歌的な空気が流れてる。

牛や羊を割とたくさん飼っていて、乳製品作りが特産と言えば特産。

この土地を持っている伯爵も遠方に住んでいて、その伯爵に任命された地元出身の村長がトラブルもなく治めているという。

「このあたりはスライムぐらいしかモンスターも住んでいないんです。なので、村の外で居眠りしても安全なほどです」

「それは本当によかったです」

「小さな村ですが、パンや塩といった最低限の生活必需品は買えますからご心配なく。ただ、人口がそんなに多くないですし、商売をする場合は大変かもしれません」

そのナタリーさんの言葉で思い出した。

「そうだ、途中、スライムを倒して宝石を手にしたんですけど、これは？」

「ああ、モンスターを倒すと魔法石という宝石が出るんです。このギルドで換金できますよ。これだと六百ゴールド、銅貨六枚ですね」

だいたい日本円で六百円ぐらいだろうか。喫茶店に一回行ける程度の値段だけど、家賃がかからないなら、必要な分だけスライムを倒して一応暮らしていけるな。

「じゃあ、早速換金してください」

「換金するためにはギルドに冒険者登録をしてもらう必要があります。かまいませんか？」

「はいはい、問題ないです」

そこで、ナタリーさんは石板みたいなものを出してきた。

「まず、この石板に手を置いてください。職業やステータスが表示されます。その情報をギルドに記録しますから」

なんか指紋認証みたいだなと思いつながら乗せる。

すると、ステータスが石板の上部に出てきた。



アズサ	
職業：魔女	レベル 1
体力：6	攻撃力：6
防御力：7	魔力：9
魔素早さ：8	知力：7
特殊能力など	
薬草に関する知識、魔女の力により不老不死	
獲得経験値	
6	

「えっ！ 不老不死！ すごいですね！」

ナタリーさんが驚いた。そりゃ、驚きもするか。職業は魔女ということらしい。

「魔女の方の中には、たしかに体内を流れる魔力——マナを調整するので長命な人もいるんですが、レベル1で不老不死というのはどういうことでしょうか。とてつもなく適性があるんですかね」

「なんででしょうね……。運がいいんでしょうね」

転生した時のボーナスですということは黙っておこう。

「では、先ほどの魔法石のお金をお支払いしますね」

銅貨六枚を私はいちだいた。

「これからもスライムを倒してお金を稼ぐことにします」

「はい、これからもギルドをよろしくお願いします、アズサさん！」

その後、私は転生した時にもらっていた金貨を使って、食材や畑に植える種などを買った。

これでしばらくここで暮らしていく下準備は整ったのではないだろうか。

帰宅する最中も、スライムが三度顔を出してきたので、ナイフで退治した。

貴重な収入源である魔法石をゲット。



その日から私のスローライフ生活がはじまった。

とにかく、だからなら、だからだと暮らした。

まず、寝たいだけ寝る。

畑の手入れは一応、やる。

体を動かしたい時はスライムを倒す。

貴重な現金収入なので毎日最低二十体は倒すことにしている。

近くの森に入ることもあった。

魔女だからなのか、どの草が薬草になるかといったことがすぐわかるのだ。

時折、薬草を作って、村に売りにいったりもする。

儲ける気もないので相場より安く売ることになっている。

また、村に急病人が出たら診察して薬草から作った薬を出すようなこともした。

さすがに村の人がばたばた倒れていくのを見殺しにはできないからね。

そういうことをしていたら「高原の魔女様」と尊敬を集めるようになった。

高原の家までチーズとか乳製品を持ってきてくれる人もいる。ありがたいことだ。

空き時間に魔導書まどうでも読もうかと思っただが、とにかく高い！でも、スライムをひたすら倒して

積み立てたお金で何冊か買う！ほししいものがあるとスライムを倒すのにも気合が入るからね。

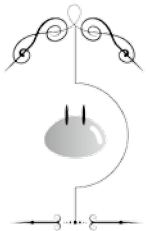
ほかには………別に変わったこともないな。

不老不死だからなのか、当然老いることもないし、体調崩すこともほほえないし。

高原の家まで会いに来る人も原則いないし、とくに困ったりもしない。日本でOLしていた時も一人暮らしだったし。

私はきつと第二の人生で初めて悠々自適ゆうゆうじてきという言葉を理解できているのだと思う。

そして、三百年が経った。



そう、私は三百年間、スライムを倒す生活を続けてきたのだ。

スライムを倒すことにかけては自信がある。

どこにナイフを刺したら一撃で倒せるか完璧にわかるのだ。

もつとも、ナイフを使わなくても、手や足だけでも倒せるんだけど。デコピンでも倒せる。少しはレベルが上がっているんだろうか。

さて、その日も、私は日課であるギルドの扉を叩いた。

魔法石の換金をしないといけないからだ。

ナタリーさんから数えて何代目だろうという女性職員さんのところに魔法石を持っていく。この人は最近、新しく入ってきた人で、まだ名前をはっきり聞いてない。

「こんにちは」

「あつ、高原の魔女様！」

もう、すっかり高原の魔女の名前で私は知られている。

三百年生きてるから、村の歴史も私が一番詳しくなっているほどだ。

「今日の魔法石です。スライム二十六匹分ですね」

「はい、たしかに確認しました。五千二百ゴールドですね」

私はそのお金を革袋に入れる。

「あつ、そうだ。高原の魔女様、気になったことがあるんですけど」

「うん、何？」

「高原の魔女様ってどれぐらいの実力なんですか？」

「実力？ バトル的な意味で？ 未知数、というか、たいしたことないんじゃないかな」

換金をするために冒険者登録はしているが、冒険をしたことなどない。冒険をするということは命懸けだからだ。私には平和なスローライフのほうが合っている。

職員さんはあの石板を出してきた。

「あの、一度、ステータス見せてもらえませんか？」

「ステータスか。そういえば、三百年ずっと測定してなかったかな」

なにせ、必要がなかった。この近所は、モンスターというところにかくスライムなのだ。レベルアップを実感するタイミングもなかった。

さすがにスライムとしか戦ったことがないというウツになるが。

森に入れば、角のついたウサギなんかもある。大きなキャタピラーもある。でも、やっぱり弱いモンスターには違いないので、ナイフで問題なく勝利した。

あのナイフは特別製なのか、三百年経ってもいまだに刃こぼれせずに使えている。

よく考えると、衝撃的だ。もしかしてすごく高価なものかもしれない。三百年もお世話に

なったものを売りはしないが。

「高原の魔女様、ずっとこのフラタ村を見守ってくれたじゃないですか！ だから、きつことつもないステータスだと思っんです。それを知りたくて！」

若い女性職員さんはすぐ期待に満ちた目をしている。

自分で言うのも恥ずかしいが、私はフラタ村のみんなから敬意を集めている。

たしかに、村が困っている時に手を貸したりはした。

疫病が流行ったことも三百年の間に何度かあったが、その都度、たくさん薬草を用意したり、体力のつく薬を作ったりして、死者が出ないようにつとめた。

それに、村人が生まれた時から高原で村を見守っているというところから、守り神的なものと認識されているらしい。

私としてはスローライフを楽しんでいるだけなので、尊敬の念が過大でむずがゆい。

「別にステータスを測ってもいいけど、私は薬草学がちょっと詳しいだけの長生きの魔女だよ。伝説の冒険者みたいなのを想像されても困るよ」

「またまた、ご謙遜を。たいしたことないといっても魔女様の基準でしょう？」

「まあ、とにかく見てみたらいいよ。普通だから」

私は石板に手を置く。

日本だったら三百年で環境も激変しているだろうに、この世界は本当に変化が小さい。いまだに石板が現役で動いている。まあ、ステータスが表示されるって、その時点でハイテクな気もするが。

アズサ

職業：魔女
レベル 99

体力：533
攻撃力：468
防御力：580
魔力：867
素早さ：841
知力：953

魔法
瞬間移動・空中浮遊・火炎・竜巻・アイテム鑑定・地震・氷雪・雷撃・精神支配・解呪・解毒・魔法反射・mana吸収・言語理解・変身・魔法創作

特殊能力など
薬草に関する知識・魔女の力により不老不死・獲得経験値増加

獲得経験値
10840086

「……………あれ？」

なんか、変な数字が出たぞ……。

「ああ、これ、石板壊れてるんじゃない？ レベル99とかいう数字が出ちゃったんだけど」

「うあああああああああああああ！！ 魔女様マジで強すぎですうううう！！！！！！」

女性職員さんがびっくりして倒れそうになった。

「無茶苦茶ですよ！ こんなの、世界一強いに決まっていますって！」

「だから石板が壊れてるんだよ。だって私、スライムぐらいしか倒してないよ？ 獲得経験値が

1084万なんておかしいでしょ？」

「ええと……魔女様は三百六十五日、三百年間、欠かさずスライムを倒してらっしゃいましたよ

ね？ もちろん、昔のことは私は知らないのだからこれまでに村のおじいさんおばあさんから聞いた話を元にしますが」

ちなみにこの世界はちゃんと太陽や月があつて、太陽暦が採用されている。

「そうだね。平均して一日二十五匹ぐらいかな。魔導書まどうがほしい時とか、家を修理したい時とか、奮発してかなりの数を倒してお金稼ごうとした気がするし」

さすがに三百年も経つと、高原の家も実質的な建て替えに近い改装をしている。

「あと、獲得経験値増加という特殊能力をどこかで得られていますね。魔女様は遠出はされてないらしいので、ある時点でレベルアップした時にその能力を手にしたのだと思います」

「そういうことになるかな」

スライムを倒し続けるだけでも、少しぐらいはレベルが上がることはあるだろうし。

「その特殊能力はモンスター一匹ごとに獲得経験値が2増えるというものです」

「なんだ、たったの2か」

「でも、スライムの基礎経験値って2なんです。つまり倍なんです。なので、ここで計算しますね。

$$\begin{array}{c} 365 \\ \text{(日)} \\ \times \\ 300 \\ \text{(年)} \\ \times \\ 4 \\ \text{(スライムの経験値+特殊能力のボーナス)} \\ \times \\ 25 \\ \text{(一日に倒したスライム数)} \end{array}$$

こういう計算式になるかと思えます」

「うん、そこまではわかる。まあ、獲得経験値が増える効果が初期から手に入っていないはずだから、現実には獲得した数字はもっと小さくなるだろうけど」

スライムを一日平均25匹倒したというのは感覚的なものだから、実際にもっと多かったら数字は変わってくるかもしれないが。スライム以外を一切倒してないわけでもないし。

「とにかく、これで一度計算してみます……。10950000……。ええと、桁はいくつですかね……。1095万！」

獲得した経験値の1084万にかなり近い！

「ちなみに1084万は、経験値が2500といわれている大型のドラゴンを4380匹倒した数

字です」

「超ドラゴンキラーだ！」

「一年間に14・6匹もドラゴンを倒していることになりませぬ……」

ドラゴンを基準に考えると、とてつもないことをした気になってきた。

「どうやら、この数字、石板の間違いではないようですよ……。やっぱり高原の魔女様は偉大なる大魔女だったんですね！」

私は自分でもその数字が信じられずに呆然としていた。

感覚的に成長しているような気はしていた。

なにせ、十七歳の肉体のまま、経験だけが蓄積していくんだから。

とはいえ、ここまで無茶苦茶な数字になっているとは……。

継続は力なりとは言うけど、力になりすぎだろう……。

いや、それよりも。

このことがあまり知られるとよくないぞ。

村のお手伝いだなんて次元じゃないことをいろいろとやらされる恐れがある。

たとえば、ドラゴンがどこそこに発生したので退治してくれとか。

そりゃ、一回だけならいいぞ。一回、ドラゴンを倒すぐらいならいい。

でも、一回でもやったら絶対にほかのところのドラゴンも倒さないといけなくなる。あっちのド

ラゴンは倒したのに、こちらのドラゴンはダメなのかと言われる。

そんなことになったらスローライフどころではない。

冒険の日々になる。

労働に明け暮れる日々になる。

最後には過労死する。

それだけは絶対に嫌だ……。

噂が広まらないようにしないと。

「あの、職員さん、お名前は何でしたっけ？」

「ナタリーです」

えっ、まさかのナタリーさん!? この人も不老不死? —— なわけないな。

そんなに特殊な名前じゃないし、偶然かぶったんだ。それだけのことだ。

日本の戦国時代にも、平成にも「まさゆき」って名前の人はいる。

「ナタリーさん、このことは口外しないでください。そもそも、ステータスはいわば個人の秘密みたいなものです。あなただっただけ胸の大きさを広められたくはないでしょう?」

「胸の大きさには自信があります」

自慢か。

しまった、胸にコンプレックスのない人だったか……。私よりは確実に大きいな。レベルが上がっても胸の大きさは変動が 아니라しく、私は三百年間同じスタイルだ。

胸のことは置いておこう……。

「とにかく、私のステータスも誰にも言わない。それでいいですね？」

「わかりました。魔女様が最強だということは外に漏れないように注意します！ 魔女様を讃えた
くはありますが、魔女様を裏切るようなことはこの村に住む者として絶対にいたしません！」

こんなところで高原の魔女の威厳が効いた。

よしよし、このまま黙ってもらえればどうにかなる。

この三百年間でステータスに興味を持ったのは、このナタリーさんだけだ。

つまり、また数百年は平穏な日々が続いてもおかしくない！ むしろ、続け！

私はほっとして高原の家に帰宅した。

あのステータスが本当か見るために、氷雪の魔法を森にある滝に向かって使ってみた。

私はまだ信じてない。強くなった実感などほとんどなかったからだ。

「すべてを凍てつかせよ！ ハアッ！」

滝がガチガチに凍結していた。

「ガチだったらしい……」



それから数日は昔買った魔導書を読みながら家でごろごろしていた。

ちなみに料理はまとめて作って冷凍している。

知らないうちに覚えていた氷雪の魔法を使ったのだ。解凍は火炎の魔法のほうを使う。台所で使
う火もこれを流用している。魔法のおかげで生活水準が一気に地球という近代人並みになった。

その結果、一日中、ごろごろだらだらできるようになった。

レベルアップ最高！

これこそ人生の楽しみであり、人生の贅沢だと今なら言える。

社畜OL時代は定時退社なんて都市伝説だったし、休日だって前日に仕事が入ってつぶれたり、
そもそも仕事が多すぎて休日出社して遅れを取り戻すしかなかったりした。

もう、あんな目はごめんだ。とにかく、だらだらしてやるのだ。

でも、同じ料理を大量に冷凍しても、やっぱり飽きてもくる。

「久しぶりに村の料理店で外食でもしようかな」

私はフラタ村に出かけた。

魔法の中に空中浮遊とか瞬間移動とか、楽に行けそうなものもあったはずだが、それを見られる
と、レベルが高いとバレる恐れがあるので、徒歩を採用した。ダイエットにもなるし。

途中、やっぱりスライムが出てきた。

三百年ぐらいたと、スライムも進化しないのかなと思いつながら指ではじいた。

それだけでスライムは死ぬ。

そういえばある時期からナイフが面倒だから、手で叩いたりして倒すのがメインになってきてい
たっけ。

これも知らない間に攻撃力が高くなってからだろうか。

しかし、魔女って物理的な攻撃力もかなり高いんだよと思う。

レベルが高かろうと、スライムが生み出した魔法石はちゃんと捨う。ほかに収入の手段がないからだ。お金には困っていないが、もらえるものはもらっておく。

数匹のスライムを倒しているうちに村に着いた。行きは下り道なので楽なのだ。

『芽えた鷺』という名前の料理店に入る。

ここはオムレツがおいしい。店でニワトリをたくさん飼っていて、卵が新鮮なのだ。

「お久しぶりです、アズサです」

「あら、高原の魔女様じゃないですか！」

料理担当の亭主にあいさつする。

いつもの席に座ると、いつものお酒をおかみさんが注文する前から持ってくる。体は十七歳だけど、私は飲むぞ。三百年、この世界に生きてるからね。

「はい、強めのお酒。魔女様」

「ありがとうございます。今日もオムレツをいただきますかな。あと、ビーフシチューもください」

「はい、魔女様」

いきつけのお店というのはありがたいなあ。

OL時代はお店を開拓する余裕もなかった。お昼はどここの店もランチが満員でゆっくりできなかったし。コンビニ弁当かカップ麺かという女子力0の食事が基本だった。

そんなに時間をおかずにオムレツが出てきた。

見ただけでいい逸品とわかる。インスタグラムに上げたいぐらいだ。

一口目からほんのりと甘い。やっぱり美味い。

「このオムレツは世界一ですね！」

「魔女様、長く生きてるからお世辞も上手いですねえ。だいたい、魔女様、ほかの町に行つて、オムレツ食べたことあるんですか？」

「私の中では世界一だからいいんです！」

「たしかに魔女様はお客さん一おいしく食べてはくれますけどね」

このおかみさんとのやりとりも、十五年以上やっているから年季が入っている。

「あ、そうだ、魔女様、お聞きしたいことがあるんですけど」

おかみさんが聞いてきた。

「はい、何ですか？」

「魔女様、レベル99だつていうのは本当なんですか？」

私は目が点になった。

「はい？ いったい、どこからそんな根も葉もない噂が？」

ここはしらばくれるしかない。驚くと藪蛇になる。

「噂の出どころはよくわからないけど、私はそう聞きましたよ。近所の子供たちが言ってたんです」となると、その子供がどこで聞いたかだな。

ていうか、もう遅いな。大きな村じゃないし、確実に私が村で一番の有名な人みたいなものだから、話は広まってる可能性が高い。

あとでナタリーさんには説教だな。起こってしまったこととはいえ、約束を破ったことは反省しなくてもらう。

まあ、私が魔法を見せなければレベルが高いことは証明不可能なので、誤魔化しとおすことは不可能ではないはず。あの人、いかにもレベル99って顔してるみたいなのはないから。

「おかみさん、私はスライムぐらいしか倒した経験がないんですよ。そんな魔法が強いわけじゃないですか。私は上昇志向も持たない平凡なスローライフ魔法女なんですって」

魔法というのは魔法使いとは別の職業だ。魔法をどんどん使うのが魔法使いで、魔法はどちらかというと、薬草や鉱石といったものに知識が深い。私が薬を作っているのも、そのせいだ。

「そうなんですか？　どんなモンスターも冒険者も勝てるわけがないほど強い、とんでもないステータスだって話だったんですけど」

思ったより具体的じゃないか……。
とにかく、ナタリーさんのところに行って状況の確認をしよう……。

私は食事を終えると、ギルドに向かった。

彼女はいつものように受付窓口にいた。

「ナタリーさん、噂が広がってますよ！　レベル99ってこと言ったでしょ！　言わないでください、絶対言わないでくださいって言ったのに！」

「えっ……？　私、言ってませんよ……。高原の魔法女様を裏切るようなことは、私にはできません……」

困惑した顔のナタリーさん。

これはウソをついている顔じゃない。となると、どうやって広まったんだ……？

しかし、ナタリーさんは何か思い当たったという顔になった。

「あっ、そうか……。そうかもしれない……」

「何か思い出したんですか？」

「たしか、魔法女様のステータスが判明した時、ギルドの中にはかの冒険者もいたんですよ……」

「あっ……」

ギルドはある種の公共スペースだ。そりゃ、小さな村のギルドでもほかに冒険者の一人や二人いてもおかしくない。

「そうだ、そうだ！　あそこにいたのは口が軽いことで有名なエルンストさんでした！　絶対にそのラインで漏れたんですよ！」

そんな冒険者に聞かれたということか……。

じゃあ、話が広がるのは時間の問題だ。

最悪、隣の村とか町にも広がるぞ！

私は頭を抱えた。別に頭痛になってるわけじゃない。社畜時代は頭痛がきつくて、よく薬を飲んでたけど、今の私は健康そのものなのだ。

考えろ。考えろ。どうすれば、被害を軽減できる？

よし！ここは違った情報で上書き保存する作戦でいく。

後ろを向いて、今はほかに冒険者がいないか確認する。

「ナタリーさん、私がレベル99だったのは間違いだったという噂を流してください」

「ウソをつけということですか？」

「そうです。私はごく普通の薬草にちょっと知識があるだけの魔女だったということにするんです。お願いします。あのステータスを表示する石板は故障していたことにするんです！」

ナタリーさんはギルド職員、ならばステータスなどに詳しくもおかしくはない。ナタリーさんが間違いだと言え、信じる人は多いはず！

「こんなにお強い魔女様を実は弱かったと言うなんて心苦しいですね……。魔女様は村の誇りですのに……」

「力を持っていることを知られても、誰も幸せにはなれないんですよ。むしろ、嫉妬する人が現れたりするかもしれない。力なんてものは少なくとも私の平和には必要ないんです。どうか、よろしくお願いしますね！」

私が蔑まれていた立場なら、みんなを見返すのもいいかもしれない。

でも、私はすでに十分に村の人から敬意を抱かれています。業や医療行為で村の力になってきたという長年の実績もある。そこにステータスの要素は不要なのだ。

「わかりました……。高原の魔女様を困らせるわけにはいきませんから……」

ナタリーさんは納得してくれたようだ。

これで、少しは傷口をふさいでいくこともできるだろう。

ひとまず、今、やれることはちゃんとやったな。

「ああ……。冒険者ランクで言うと、間違いなくSランク中のSランク、王国はじまって以来の伝説になるのに……。残念です……」

「残念でも我慢してください」

「フラタ村の名前が王国中に知れ渡るのに……」

「それでも我慢してください。有名税という言葉があります、静かな村にトラブルが起きる危険も生み出します」

「あの、ギルド本部に伝えても——」

「絶対にダメです！」

私は手で×の印を作って、ナタリーさんの願いを全力で突っぱねた。

これまで村と私の関係はいいように運んでいた。それが続くだけだ。何も問題はない。

私はそれ以降、村の人に自分の力を絶対に見せないように気を配った。

これまでも見せてなかったたので、ようはごく普通の魔女として振る舞えばいいのだ。

ナタリーさんも石板のことは間違いだったと周囲に言いはしてくれたらしく、レベル99なんですかと聞いてくる村の人たちはもう現れなかった。

それで、この一件は終わった。

またスライムを倒して、薬を作って、生きていくんだ。だが、そう思っていたある日。私の家の扉をノックする人がいた。いったい誰だ……？



私の家をノックする人はほとんどいない。まず、立地条件が悪い。

村からもしばらく歩いたところにある高原なので、来るのが面倒だ。何かの施設の通り道でもないから、ついでに寄るといってもできない。

それと、魔女というのは村の人からすると、特別な存在なので、気楽に遊びに来る人はいない。たまにおすそ分けで何か持ってきてくれることがあるが、それぐらいだ。

そういった理由から、私の家に誰かが来るといことはまずない。

もちろん、子供が急病なので薬を分けてほしいとか、緊急の理由もあるかもしれないし、そんな時はすぐに駆けつけるけど。

本当に急病人だったら大変なので、読んでいた魔導書を閉じて、玄関のほうに向かった。ドアを開けると、四人の冒険者パーティーがいた。

少なくとも村人じゃない。

まず、正面にいたのは若い剣士といった雰囲気男性。二十代前半だろうか。

そのほか、筋肉ムキムキの男剣士に、いかにも魔法使いといったローブ姿の女性、まだ二十歳いかないぐらいの聖職者の合計四人。

「はい、いったい何でしょうか？」

このへんに強いモンスターでもないか聞きに来たんだらうか？

見事にザコモンスターしかいないから、申し訳ないな。

ちなみにすごいお宝が眠っているダンジョンなどもない。むしろ、ダンジョンがない。強いて言えば、森に薬草になる植物が生えているぐらいかな。

冒険に関する事だしたら、適当にお断りしよう。

「あなたが高原の魔女アズサさんですか？」

リーダーらしい若い剣士が言った。

「はい、そうですが。残念ですけど、このあたり、冒険には不向きな土地ですよ。モンスター弱いし、ダンジョンもないし」

「いえ、そういった目的ではないので、大丈夫です」

じゃあ、なんだ？ 行商？

「あなたと腕試しをさせていただきたいんです」

「……………えっ？」

私の声が裏返った。そんな提案、初めて聞いた。

「腕試し？ 腕相撲でもするんですか？」

「違います。戦闘を行いたいのです」

「私、ここで葉草をとったりして細々と暮らしてる魔女ですよ？ 私なんかと戦っても何の武勇伝にもなりませんけど？」

「ここにレベル99の魔女がいると聞きました」

噂広がってた！

やはりギルドにいた冒険者に聞かれていたんだな。地域密着型の冒険者でさえ、このあたりの村や町は巡回するから、そりゃ、広まるか……。

「ははは……あれは誤解ですよ。石板が壊れてて変な数値が出ただけです。私の実力はせいぜいレベル10ぐらいですって……。いやあ、レベル10でも盛りすぎかな……。レベル3ぐらい……？」

「ウソをつくのはよくないわ」

魔法使いとおぼしき女性が言った。この人は二十代後半ぐらいだ。

「私も近い立場だからわかる。あなたの体からマナの気配があふれんばかりに漂ただよってるわ。とんでもない大物なのは間違いない」

げっ！ そんなことでわかるのか！

なんだ、そのスタンド能力者は引かれあうみたいな設定……。

でも、私は絶対に戦わないからね。絶対にだ。

一回戦つたら歯止めが利かなくなる。

「あくまでも、仮にですよ？ 仮に私が実力ある魔女だとしても、あなたたちと戦う理由がどこにもありませんよね？」

まったくもって正論だ。私は正論を押し通すことにする。

道場じゃないんだから道場破りされるいわれはない。

「俺おれたちは強くなりたいです。そのために、ぜひ手合わせを！」

丁寧な態度ではあるけど、そんなのに付き合うのは嫌だ。

困ったな。この人たちに帰ってもらえないと平穏が崩されてしまう。

こうなったら、ウソをつけて誤魔化すか。

コホンと咳せき払いをしてからはじめる。

「実は、私も昔は自分の力に溺れていた時期があったんです」

※ないです。

「そんなことが……」

思ったより真剣に聞いてくれるな。微妙に罪悪感がある。

「ですが、そこでたくさんの人を傷つけてしまった。中には私の攻撃魔法を受けて命を落としてし

まった人すらいます」

※スライムぐらいいしが倒してません。

「だから、もう戦わないことに決めているんです」

※これは偽りなく本心です。

「偉大な冒険者にもつらい過去があるんですね……」

「だから、あなたたちと戦うことはできません。わかってください」

※頼むから、わかれ。

これでこの人たちは諦めるだろう。

「アズサさんのお気持ち、理解しました。俺たちは引き下がります」

「ありがとうございます。皆さんの旅路が明るいものでありますように」

「これからは俺たちみたいな冒険者がたくさん来て、大変だと思えますが、いきなり攻撃されたりしないように、くれぐれもお気をつけください。名を挙げることはかり考えている冒険者も中にはいますから」

ちよつと待って。

「そんなに私の話、拡散してるんですか？」
嫌な話を聞いた。

「はい。この地方の冒険者の間ではもう知らない人はいないかと。それにこの土地の冒険者からしたら、高原の魔女アズサさんが最強ということは誇りにもなりますし」

なんで勝手に郷土の誇りにしてるの！ スローライフの邪魔をしないでほしい。

やむをえない。

作戦を変更するか。

「わかった。あなたたちとだけ一度手合わせしましょう」

「本当ですか！」

すごくパーティーが湧きたつ。こっちがタレントみたいな扱いだ。

「ただし、交換条件があるから。そちらが負けたら、高原の魔女はたいしたことなかったと言って回りなさい。私ができることなら戦いたくないんです」

こくこくと魔法使いの女性がうなずいた。

「さてと、戦うといってもあなたたちに大ケガをさせるのは嫌だから……」

私は外に出ると、畑仕事用のクワで地面に大きな円を描く。

厳密な円じゃなくてかなり楕円だが、別にこれでいい。

「ここからはみ出たほうが負け、ということにします。それでいいですね？」

もちろんノーと言われることはなく、話は決まった。

これなら、誰もケガせずにはすぐ勝負がつく。

「私のほうは私が円から出たら負け。そちらは全員が円から出たら負け。そういうことにします。ちなみに一回外に出た人は退場ね」

向こうに有利な条件だから文句も出ないだろう。

「では、早速はじめ！」

先手必勝とばかりに魔法使いの子が杖を前に突き出して、何か唱える。

「風よ、今こそ我の下僕となりて、吹き荒れよ……」

そりゃ、風で飛ばしてしまえという発想になるな。私も同じだ。

ブオオオオツッ！

こちらに渦を巻いた風がやってくる。

音だけでもかなりの威力なのがわかる。どうやら、それなりにハイクラスの冒険者たちらしい。

竜巻の魔法ってこうやって使うのか。

私もステータスの中に持っていたけれど、使い方がよくわからなかった。氷雪の魔法も適当なことを言ったら発動したので、厳密な決まりはないのかもしれないが。

対策はないこともない。

名づけて、目には目を作戦。

「風よ、今こそ我の下僕となりて、吹き荒れよ！」

相手と全く同じ言葉を発した。

ぶっちゃけパクった。著作権は異世界にはない！

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！

相手の数十倍はあるかというような竜巻が発生した。

そのまま彼らのほうに向かっていく！

まず魔法使いの子の竜巻を呑み込んで吸収して、打ち消されることもなく、むしろ加速する。

「あんな竜巻見たことないわ！」「化け物だ！」「逃げろっ！」

相手はみんな驚いていた。それだけ巨大な竜巻ということだろう。

もう、私が魔法を使った時点で戦意を喪失していると言ってよかった。

竜巻に呑み込めば、最低でも円の外にまでは出せるだろ。

パーティーは全員、その竜巻をまともに喰らった。よし、成功した！

ただ、ちよつと勢いが強すぎたかもしれない。

「きゃあああああああ！」

「うあああああああ！」

「助けてくれえええ！」

パーティー一行が竜巻に巻きこまれたまま——どんどん遠くに飛ばされていく。

しまった！ レベル99の威力を舐めていた！

円の外とか、明らかにそういう次元じゃない！

ただ、竜巻も時間とともに少しずつ力が弱まってきたようで、パーティー一行はやがて地面にソ



フトランディングしていったようだ。

ふもとのフラタ村のあたりに。

「あつ、ヤバイ……」

はつきり言って、一番都合の悪いところに落下した。

そのあと、確認のため、村に向かった。

「いやあ、熟練のパーティーを竜巻一つで吹き飛ばすだなんて、さすが高原の魔女様です！」

「高原の魔女様の實力をはつきりとこの目で知りました！」

「この村はこれから数百年は安泰あんたいですね！ やっぱりレベル99というのは事実なんですわね！」
もう、すっかり私がパーティーを蹴散けちらしたことが話題になってしまっていた。

それはそうだろう。あの大竜巻、絶対にふもとの村から見えたもんね……。

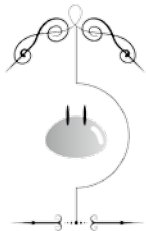
「パーティーもみんなイチから出直してくると言っていましたよ！ いつかさつと高原の魔女様みたいになると語っていました！」

あの人たち、私のこと、言っちゃってるじゃん！ 約束と違う！

飛ばされてるのを目撃されたんじゃ誤魔化しようがないか。凶悪なモンスターが現れただなんてウソをついたら村がパニックになるし……。

「はい、私が魔法を使って吹き飛ばしました……」

高原の魔女がレベル99というのは村なら誰もが知る公式の情報になったらしい。



ドラゴンが来た

She continued
destroy slime for
300 years



実力が（不本意にも）知れ渡ったあと、モンスターに関する本などを取り寄せて、勉強をはじめた。モンスター退治に目覚めたのではない。どちらかというと、その逆だ。

ある程度、モンスターに対する知識があれば、退治を頼まれてもアドバイスをするぐらいで私が出向かずに切り抜かれるかもしれないからだ。

こちらとしてもその程度の協力ぐらいはしてあげてもいい。私は馬車馬のように働かされるのが嫌なだけなのだ。

なにせレベル99だよ。そんなものがこの世界でほほいさないことは私にでもわかる。

あらゆる厄介ごとが集約されて私のところに来たら、悲惨なことになる。

パーティー一行を吹き飛ばしてから、まだ十日ほどなので私の生活にそう変化はない。ドラゴンを倒してくれとかいうような依頼も来ていない。

ただ、これまで以上に村の雑貨店に委託している薬の売れ行きが伸びているので、薬草をとる量を増やしたりはしている。

きつとレベル99の魔女が作った薬ならよく効くと思われたのだろう。はっきり言って大差ないです。

「ネット社会ではないし、情報拡散が遅いのかな。このまま話題が広がらずに消えてくれればいいんだけどな」

だが、そんなことを言っていたのがいけなかったのか、ドンドンとかなり強くドアがノックされた。今度は誰……？

叩き方が乱暴だから村の人である可能性は低そうだ。

居留守を使っていると、ドアを破壊されそうなので、とつとと開けにいった。

ドラゴン退治を手伝えとかだったら、上手くドラゴン攻略法を伝授して立ち去ってもらおう。どこかの町が減ばされそうとか緊急の要件でなければいいな。

「はい、どなたですか？」

ものすごく巨大なものが私の前にいた。

背が高い。それ以前に、これ、人間じゃない。

大きな翼。大きな体。炎とか吐きそう。二本の角も生えている。

ドラゴンが来ていた。

というか、さっきのノックも尻尾でやったな。だから、音が乱暴だったのだ。

「ええと……どういうご用件でしょうか？」

読んだ本によるとドラゴンは高等なモンスターなので、言葉が通じるらしい。

そもそも、ドアをノックしたということはそういう知能があるんだろう。

早速、本の知識が役立つけれど、こんな形で役立てたくなかったよ……。

「我はこのナンテール州最強のモンスターと呼ばれておるドラゴン、そのドラゴンの中でも最強と言われているライカである」

ドラゴンは人の言葉を解するだけでなく、話せるのか。

しかし、声が大きいのので頭に響く。ライブ会場に来たみたいだ。

「そのドラゴンが何の用ですか？」

「最近、風の噂でここに最強の魔女がいるという話を聞いた」

「まさか、力比べに来たとか言いませんよね……？」

「なんだ、話が早いな」

どこまで噂広がってるんだよ！

せめて、人間の範囲でストップさせてほしい。

最悪だ……。ドラゴンを倒そうと誘われるんじゃないかってドラゴン自体が来るなんて！

「私は最強の称号なんてほしくありません。単に三百年こつこつ経験値をためていたら、大きな数字になっていただけです。なので、最強の称号はあなたに譲りますよ」

「そんなことで納得できるか。我と戦え。そして、白黒をはっきりとつけようではないか！」

猛烈に迷惑……。

だから、道場じゃないんだから道場破りに来ないでよ……。

「嫌です、と言ったらどうしますか？」

「まず、この家を踏みつぶしてやるぞ。畑も荒らしてやる」

なんだ、話が早いな。

まさか、
力比べに来たとか
言いませんよね……？

——ドアを開けたら
ドラゴンがいた。

これは戦うしかないなあ……。

家がなくなったらのんびり過ごすことだって絶対にできなくなる。

「わかりました。やりましょう。でも、別に私は最強名乗ってませんから、私のほうが余裕で弱かったりしたら手加減してくださいね」

「よからう。我も最強であることが確認できればそれでよいからな」

私たちは家から離れた、だだっ広いところまで移動した。

住居を戦闘中に壊されてはたまらないからだ。

「では、このライカの力、存分に思い知らせてやろう！」

「はいはい、どうぞ好きなだけ思い知らせてください」

ドラゴンは翼をはためかせて、ばさばさと飛び上がる。

「お前を焼き尽くしてやる！」

口から炎を吐き出してきた！

こんなものをまともに喰らってたまるか。大火傷なんて勘弁してほしい。

「すべてを凍てつかせよ！」

氷雪の魔法を炎にぶつける。

私の作戦は成功だったようで、魔法とぶつかって炎は相殺されて消えた。

「ちっ！ なかなかやりおるな！ やはり、高位の魔女ということは本当らしいな！」
わざと負けたふりをするなんてこともできないな。

実力行使で早く倒すのが、結局一番効率的なのか。

さてと、どうやって戦うのがいいかな。相手は浮いているからな。

「今暫く地上より別れを告げる！」

私は詠唱を行って、空中浮遊の魔法を使った。

これでドラゴンと対等と言えなくもない。

空中浮遊自体はフラタ村から帰る時とか楽だから、ちよくちよく使っている。

ここからどうやって戦ったものか。

あんまり接近したくない。となると魔法で戦うことになるが、さすがにこのサイズだと人間みたいに竜巻で吹き飛ばすこともできないだろう。仮に飛ばせたとしても、こんなのが村に落ちたら大きな被害が出る。

となると、雷撃だろうか。でも、正直、力の調節ができる気はしない。スライムと違って、知能の低いドラゴンを殺すと、罪悪感が残りそうだ。極力、命はとらない方向で。

となると、火炎か氷雪か。

火炎はまさしくドラゴンが炎を吐いてるぐらいだから効かないかもしれない。

じゃあ、氷雪しかないな。

「こちらの真似をして飛び上がってくるか。こしやくな！」

私を叩き落そうとドラゴンが手を伸ばしてくるが、これぐらいはすぐに回避する。

そして、手を空振ったドラゴンに隙ができた。

思い切って、ドラゴンに近づく。

「焼き落してやるわ！」

また炎を吐こうとドラゴンが口を開けた。

それを待っていた。

私は氷雪魔法をドラゴンの口めがけて、放つ。

「すべてを凍てつかせよ！」

ドラゴンの口が凍りつき、霜が張る。

一挙にドラゴンの口が氷の洞窟のようになった。

「あぐっ！ うぐっ！ ぶぐうううううう！」

ドラゴンはパニックになって、そのまま地面に降り立つと近くを走りまわった。

決まったな。これなら命を奪うこともなく、相手を大混乱に陥れられる。

「どう？ 頭がキーンときたりした？」

情けないぐらいにあわててるな。ところかまわず走っているのがいい証拠だ。

あれ？ 走りまわる？

嫌な予感がした……。

「私の家、壊さないでよ！ 絶対壊さないでよ！」

「うぐううううう！ 冷たいいいいいいいいいいい！」

だが、ドラゴンは家のほうに走っていて——その隅にぶつかった。

——ぐしゃっ。

当たった隅の部屋が壊れる。

私の怒りに火がついた。

「壊すなって言ったじゃん！」

ドラゴンに接近し——

「これは壊された部屋の痛みだっ！」

——物理で殴る！

「ぶはあっ……」

そのパンチでドラゴンはノックアウトされた。

高原にばたんと倒れる。

死んではないようだが、ダメージが大きくてしばらく動けないらしい。

さすがに拳で殴ったので、手が痛かった。折れたりしてないだけ、よしとしようか。

「な、なんという力……。我がごうも無様に倒れるとは……」

ドラゴンも自分が置かれている状況が信じられないらしい。

「ひとまず、これで私の勝ちなのはいいとして……」

私は一部損壊している家を見た。

絶対に弁償させるぞ。

「ねえ、ドラゴンのライカさん」

近づいて、ドラゴンをつつく。

「私の家、なおしてくださいね。でないと許しませんからね」
顔だけは笑っているけど、目は笑っていないかと思う。

それでドラゴンにも私が相当な剣幕であることは伝わったらしい。

「わ、わかった……。どうにかする……。だ、だから許してくれ……。命まではとらないでくれ……」
「とりませんよ。命とつたらなおしてもらえなくなるでしょうが。保険なんてかけてないんですからね」

寝室などは被害はなさそうだが、風も入ってきたりするかもしれないし、しばらくは村の宿屋で寝泊りするべきかな……。

「あの……：私は住処すまかの山にそれなりにお金は貯めこんでおりますので……それをとってきてもよろしいでしょうか？ それを修理費用にできればと……」

そういえば、ドラゴンって黄金を集める性格を持っているとか聞いたことがある。

「いいけど、逃げたら討伐とうばつに行くのでそのつもりで」

「絶対に約束は守ります！」

ドラゴンはふらつきながら空へ飛んでいった。

その日、私は宿泊のために村に行った。

「あっ！ 魔女様！ ということはドラゴンを倒したんですね！」

「ドラゴンの姿、村からもよく見えましたよ！」

「あのドラゴンを倒すなんてさすが魔女様！」

やっぱり広まっているか。

大きなドラゴンは遠くからでも絶対に目立ったもんな。

「すいません。ドラゴンには勝ったんですが、家の一部が壊れたので、少しの間、村の宿に泊めてもらいに来ました。お騒さわがせしてすいませんでした」

「いやいや悪いのはドラゴンのほうですよ！」

「むしろこの村をドラゴンから守ってくれたようなものだ！」

「宿の一番いい部屋にお連れしよう！」

「馬鹿者！ 魔女様をお泊めするに足る宿屋など村にはない！」

結局、そのあと話が二転三転して私は村役場にある来賓用らいひんようの部屋に泊まることになった。王国の役人などが仕事で訪れた時に、ここで宿泊するのだ。

たまには厚意に甘えるのも悪くないと考えよう。

あとで高価な薬を寄付すれば帳尻も合うだろう。

宿泊がてら久しぶりに村をのんびり散歩していたが、私がここに来た三百年前と比べると村は割と活気があると思った。人口も増えているはずだ。

理由はいろいろあるだろうけど、一つはどうかやら私のおかげらしい。

村の人がよくそう言ってくるのだ。

なんでも、私が貴重な薬を村のために作ったりしたかららしい。

どんな村でも、寿命以外に病気やケガで死ぬ人はいる。そういう死亡リスクが私が薬を供給してきたことで、この村は周囲の村と比べてかなり低くなったそうだ。

とくに子供が病気で死ぬようなケースがずいぶん減ったことが人口増加に寄与しているという。

私も病気の時の薬だけでなく、子供用の栄養剤みたいなものも作ったしね。私としては薬草を集めての薬作りはスローライフの中での趣味みたいなもので、その趣味で人命を守れているなら、それは大変光栄なことである。

その日は帰宅する必要がないから酒場でゆっくりお酒を飲むことにした。

酒場は夜でも活気があった。

「あっ、魔女様だ！」

「魔女様に乾杯！」

すでにできあがっている人も多くて、酒場はにぎやかだ。

私はテーブル席に案内された。

なぜか、頼んでもないのに高級そうなお酒が出た。

「あの、私、まだ頼んでないんですが」

「私、子供の頃、魔女様の薬で助かった経験があるんですよ」

酒場の娘さんが笑って言う。

「だから、これはお返しのもりです。ゆっくり飲んでいってくださいね」

今日は始終こんな感じだな。全然、お金を払わせてもらえない。

たまにはこういう日もいいかな。

私はお酒を少しずつちびちびと飲んだ。

OL時代は忙しかった。はつきり言って社畜だった。

誰かのために働いているという実感はほとんどなかった。強いていえば、会社のために働いただけだった。だから、どんなに忙しくても空しさがあった。

人と接すること自体は、スローライフの信条にも反しないし、もうちょっと村に足を運んでもいいかもしれない。

高いお酒はたしかにいつものお酒と違う味がした。まろみがある。この味わいがきつと高い部分だな。

「あー、おいしい。昔と比べれば、今は天国みたいなものだよ」

思わず声に出してしまった。

「俺たちも魔女様に守られて生きているから、天国に住んでるようなものですよ！」

「若い頃は長く旅をしてきたけど、フラタ村ほどいい村はどこにもねえな！」

私の目の前から称賛の言葉は何割かは差し引いて考えるけど、それでもうれしいことはうれしい。

「私もこの村の近くに住んでよかったですと思います」

心からそう言った。

この村は私の自慢みたいなものだ。

これからも村の発展を見ていきたいな。

その日はほどよく酔っ払って、宿泊用の部屋に戻って眠った。

少し眠るのが遅かったけど、それでも社畜時代よりは早い。そもそもあの頃は朝六時台に起きないといけなかったからな……。三百年前のことなのにはつきり思い出せる。

朝食も村にしてはかなり豪華なものが出た。

きつと、来賓用の接待方法を私に適用しているんだろう。

「魔女やってよかったよ……」

朝食を食べる。とくに牛乳がとれたばかりの新鮮なものなのか、すごくおいしい。

料理自体の味付けは日本の物と比べるとシンプルだし、どうしても大味になってしまいが、この牛乳に関してはフラタ村のものに軍配が上がるな。パック牛乳とは比べ物にならない。料理を作ってくれた人と、牛さんに感謝！

そうだ。今度、料理でも教えてあげようかな。

日本時代の知識はまだまだ残っているから、何かアイディアレシビ的なものを教えられるはずだ。

そんなことをぼんやり考えていると、料理係の人が早足でやってきた。

「高原の魔女様、魔女様に会いたいという方がお見えになりましたのすが」

「じゃあ、空いている応接室で待ってもらっていて。もう、三分もしたら食べ終わるから」
今度は村の誰だろうと思いつながら、応接室に入った。

そこには頭から角が二本突き出た少女がいた。

見た目で言うと女子中学生ぐらいの年齢だろうか。十三歳ぐらい。

服装は少しロリータファッションぽい。

コスプレではなくて、普段着とはつきりわかる程度に似合っていた。

誰だ？

角が生えている村人なんて見たことないぞ。

というか、角が生えているんだから普通の人間ではないよね。

「昨日はご迷惑をおかけいたしました」

私と目が合うと、その少女は丁寧におじぎをした。

「あの……昨日と言われても初対面だと思っただけ……」

角が生えている人なんて見たら絶対に忘れないだろう。

「ああ、姿を変えているから、わからないんですかね」

姿を変えた？ 鶴を助けたこともお地藏さんを助けたこともないよ。

「我は昨日のドラゴン、ライカです」

「ええええええええええっ！ ていうか性別、女子だったのか！」

そういえば、ライカって名前の響きが女子と言えば女子っぽいよね……。

「ドラゴン族はマナをたくさん持っている者が多く、こうやって姿を人間に変えることもできるのです。こうしないと人間の里に出ていくとパニックを起こしてしまいますから」

ライカというドラゴン少女が言った。

たしかにドラゴンが村にやってきたら、村は大変な騒ぎになるだろう。

村の人間をすべて動員してもこんな巨大な生物に勝てる手段など存在しない。

「でも、少女って年じゃないよね？」

一人称が「我」で十三歳ですということは無いだろう。

「かれこれ、生まれて三百年になりますかね」

「だいたいタメか」

三百歳でタメというのもおかしいが、実際そうなのでしようがない。

「それと……これをお納めください」

ライカは大きな布の袋をテールに置いた。

少女が持てる重さではなさそうだが、そこはドラゴンだから問題ないのだろう。

「これは何？」

のぞきこんですぐに答えが出た。

金貨だ。

「つまり修理代金ってことね」

「そういうことです。これまで我が貯金していたお金を持ってまいりました」

意外と蓄財しているな、ドラゴン。

「ありがとう。これだけあれば修理ぐらいならできるでしょ」

家を現状復帰させることだけならこれで大丈夫そうなので、私もほっとした。

しかし、まだ何か言いたいことがあるのか、ライカはもじもじしていた。

もしや、この金がないと難病の娘が救えないとか、そんな理由でもあるのか？

私も鬼ではないので、そのあたりの事情があるなら汲むよ？

「その、実はお願いがありました……」

「何？ 言うだけならタダなんだし、好きだけ言っていよいよ」

「我を……で、弟子にしていただけじゃないでしょうか？」

言われて、きよとんとした。

「弟子？ つまり、私が師匠？」

「はい。魔女様と戦って、我がまだまだ未熟であるということを感じました。ナンテール州最強という思いあがり捨てて、また一から勉強したいなと思っっている次第です」

「その心構えは美しいけど、で、弟子？」

そんなの三百年生きてきて一度だって考えたことなかったぞ。

「あのね、隠したままなのはまずい気がするから言うけどね、私は特殊な訓練で力を手に入れたんじゃないの。近所にいるスライムを倒す生活を長らく続けてたら、経験値がたまりまくってこうなっただけなの」

だから教えられる知識など何もない。

「いえ、まさしくその努力の積み重ねこそ見習いたいのです！ 我はドラゴンとしての力を過信して、



傲慢ごうまんになり、腕みを磨くということをしてきませんでした。その結果が無様な敗北なのですから！」

思った以上に真面目だぞ、このドラゴンの子……。

「でも、それだったら何を教えられるわけ？」

技術を教えないんだったら弟子にする意味がないだろう。

「住み込みで働かせていただいて、その生活を学ばせていただければありがたいのですが」

ルームメイトということか。

正直、大変悩んだ。

別の人間が住んでいるということは一人でだらだらするのは違って、ストレスが発生するからだ。

それに三百年間一人暮らしだったので、今更二人暮らしというのもなあ……。

待てよ。

「住み込みと言ったよね？」

「はい」

「ということは料理作ってくれたり、掃除してくれたりもするの？ いや、全部任せっぱなしって

ことはしないつもりだけどね」

「もちろん、やりますよ。料理も掃除もお願いして、しかも弟子にしてくださいというのは都合が

良すぎますから」

ちょっと気持ち揺れ動いた。

だったらいいかな。



三百年の一人暮らしで生活がマンネリ化していたというのも事実だ。
もはや伝統といったほうがいい域だ。日本で三百年一人暮らしをした人間はいない。一人暮らしには一家言ある。

その伝統に終止符を打ってもいいか。

「わかった。あなたを弟子にすることを認めましょう」

「ありがとうございます！」

ライカは丁寧に頭を下げた。二本のかわいい角が私のほうを向く。

三百年、魔女をやってきて、ついに弟子ができました。

※試読版はここまで。

『プライム倒して300年』

知らないうちにはベルMAXXになりました』は

2017年1月14日発売です。お楽しみだー！